前句付けの遊びと昔話

――幽霊済度譚の形成――

小林幸夫

（一）題詠の遊び

近世初期の咄本を開けば、同じ趣向に遊ぶ咄がいくらも出てくる。題詠に遊ぶ狂歌咄もそのひとつである。かつての歌の遊びと、それが生まれる咄の場をいまに伝えているように思う。たとえば『きのふはけふの物語』（上）には、きわめて単純な咄がある。

二度もの思、といふだいにて

大ちご　春は花、秋はもみぢを、ちらさじと、としにふたたび、ものおもふなり

小ちご　朝めしと、又夕めしに、はづれじと、日に二たびわ、ものをこそおもへ

題詠に遊ぶ和歌の歴史は長いから、いちいちここに論ずることはしない。長い歴史があるからこそ、こんなささやかな咄にも、いろいろに類話がうまれる。比較してみれば、少しはその性格がわかるだろう。

『戯言養気集』（上）に「うたの事」とあるもの。

ある山寺の児たちにあはんとて、武士衆登山有けるに、二たび物おもふといふだいにて歌あり、

春は花秋はもみぢを散さじととしに二たび物思ふなり

大ちご

朝めしと又夕食にはづれじと日々に二たび物をこそおもへ

小ちご

かくて武士衆へも所望ありければ、取あへず、

国を望み国を取りては乱さじとさらに二たび物おもふかな

評して云、かなしひかな、二たび物を思はざりしゆへに、うき事をのみ万人にったふ。

これは前のふたりの児の歌に、武士の歌をくわえただけのもの。あまりに工夫がない。「二度物思ふ」を歌の題として、座を同じくする人々が、おそらく競詠しあってできあがったのだろう。それを三人の歌に託して遊ぶ。こうして咄は遊びからうまれるのであろう。

つぎのは『醒睡笑』（巻之五）に「人はそだち」として分類してある。

山の一院に児三人あり。一人は公家にておはせし。坊主、「年に二度物思ふ」といふ題を出せり。

春は花あきは紅葉の散るをみて年にふたたび物おもふかな

一人の小児は侍にてありし。「よるは二度物おもふ」といふ題なり。

宵は待ちあかつき人のかへるさに夜はふたたびもの思ふかな

いまひとりの児は中方の子なり。「月に二度物思ふ」といふ題にて、

大師講地蔵講にもよばれねば月にふたたびもの思ふかな

もちろん前のふたつの咄と同工異曲であるが、少し趣向をたてている。なるほど「人はそだち」で、歌にもそれがあらわれる。三者三様の歌いぶりである。同じように「二度物思ふ」を歌の題とするにしても、『醒睡笑』のこの違いはどこからくるのか。おそらくこの咄は説教の場をくぐりぬけているのだろう。いずれそのことに触れる機会はあるだろう。まずは指摘にとどめておいて先にすすもう。

歌の遊びから咄がうまれてくる。前に示した三つの例は、そのことを語っている。もちろんもっと具体的に見ていく必要はあるが、その前にさまざまな歌の遊びのあることを、いましばらく追いかけてみよう。『臥雲日件録抜尤』は「和尚と小僧」の咄を記録しているが、これも題詠の遊びである（寛正六年三月廿日条）。

三蔵主来、又話三井寺三児和歌、蓋三児之師、持金盆一枚、命三児令詠和歌、以櫻花為題、意在以盆可付能詠者也、小児歌曰、「櫻花、第四静慮ニ、サカセハヤ、風災ナクテ、イツモナカメン」、—「櫻花、第四静慮ニ、サクトテモ、眼識ナクテ、イカヽナカメン」、—「櫻花、第四静慮ニ、サクナラハ、下地ノ眼識、カリテナカメン」、其師曰、三歌皆好、於是破盆作三付三児云々

師の坊が「桜の花」を題として上手に歌を詠んだなら、ごほうびに金のお盆をやろうという。そこで三人の児がそれぞれに詠んだ。いずれもたくみに詠んだので、師匠は金盆を三つに砕いて与えたという。横川景三が語った咄である。「第四静慮」とは、欲界の迷いを超えて色界に生ずるための瞑想のうち、苦楽を超えた瞑想の境地をいう。桜の花の美しさはそんな境地を超えたところにあるとでもいうのだろうか。もしそうだとすれば、歌の遊びとはいえ、いかにも禅僧の好みそうな理屈っぽい話である。

同じ歌の遊びでも、こちらは興福寺・多聞院の僧侶が記録したもの（『多聞院日記』天文十年条）。禅僧の話題とはちがって、ずいぶんくだけている。その例を二つ示しておこう。

（1）

同上ニ「犬」トおき下ニ「まさる」と云テ一首アルヘシトアリシカハ、

小児　風いぬるとはかりきけはさく花の今一しほにいろまさるなり

中児　なく犬のこゑすこかりしおりふしはおかしらともに色まさるなり

大児　犬の時子の時までもかくせすり毛つひおもへはおへまさるなり

（2）

師匠児三人アリシニ、「ノホラハヤ」ト云五文字ヲ置テ、好ノママサル前句アルヘシトアリシカハ、

小児　登ハヤ我手トツカヌ花ノ枝

中児　ノホラハヤ都ハ花ノサカリニテ

大児セスリ声ニテ　ノホラハヤアヲノキフセル開（フシ）ノ上

児三人、なかでも大児の歌は、卑しすぎてばかばかしい。これも与えられた歌の題にしたがった題詠の遊びである。あとの話（2）などは近世の雑俳、いわゆる笠付け、冠付けにひとしい。上に「ノボラバヤ」という五文字を置いて、付け句を競いあっている。もちろん三人の児の歌に託して作られたたわいもない笑話であるが、こういう咄がうまれてくるいきさつを考えるうえで、とてもいい材料となる。咄のうまれてくる経緯をさらに追いかけてみよう。

（二）前句付けの遊びと狂歌咄

連歌にしても俳諧にしても、付け合わせることが基本である。「ノボラバヤ」の上句につづけて五・七と付けるところに遊びはある。

「合わせる」遊びにも長い歴史はあって、「歌合せ」のほかに「貝合わせ」、「絵合わせ」、「根合わせ」などさまざまであるが、付け合いの文芸も「合わせる」ことを旨とする言葉の遊びといってもよい。こういう遊びのうちから咄はうまれてくる。

同じ『多聞院日記』（天文八年八月二十一日条）を例にとってそのいきさつを示してみよう。多聞院に柳江という連歌師が訪れてしばしば連歌に遊ぶ。[1]

同人（山崎の柳江という連歌師）、こまにて

立つもたたれずいるもいられず

山のはの雲にいくたび夕あらし

此前句ニテ古クハ

はぬけ鳥つるなき弓におどろきて

前句は意味不明であるが、付け句でそれを解釈してみせる。謎のような前句を出して、付け句でそれを解いて遊ぶ。柳江は同座する人々に、古い付け合いを先例として示したのであろう。それを前句としてあらたに付け合いを楽しんでいる。その古句は、『犬筑波集』（雑部）のつぎのもの。

ゐるも居られず立つもたたれず

羽抜鳥弦なき弓におどろきて

俳諧の連歌がどのようなものであったかよくわかるだろう。前句の謎を付け句で解く、「付け合い」の遊びなのである。こういう例はいくらもある。同じ『犬筑波集』（雑部）から。

ふくもふかれずするもすられず

われ笛のさらば鮠になりもせで

山伏の貝われずずの緒は切れて

硯水うみにほこりのたまりきて

「付ける」とは何か。あらためていうまでもないが、正体不明の謎の句に、意味を与えて解釈すること。さまざまな付け句が出されて、いろいろに解釈が示される。句を付け合わせる楽しみが、そのままなぞ解きの遊びになっている。単純ではあるが、座を同じくする人々が、共同で楽しめるところに、前句付けのおもしろさはあったのだろう。

共同で句を作りあげていく遊びから、咄がうまれてくる。作られるのは句ばかりではない。咄もまたこしらえあげられる。[2] たとえば『伊勢誹諧聞書集』の前句付けがそれである。

内宮西行谷連歌満座之後三人会合前句付

吹もふかれずするもすられず　といふ前句に

山伏の貝われ数珠のをがきれて　宗祇

いましめの硯の上に塵有て　宗長

われ笛のさらはささらに成もせで　守武

伊勢西行谷での俳諧ならば、やはり神宮ゆかりの守武をつれてくる。たとえ嘘にしても、彼を一座にくわえて、宗祇、宗長との付け合いとする。それだけであらたな連歌咄となるのである。もちろん高名な連歌師に付会されるには、別の理由がある。彼らの句とすることが、そのまま彼らの賛嘆につながったのであろう。文字で読むことに慣れたわれわれには想像しにくいが、これが話題となった咄の場では、おそらく宗祇たちの即吟とされたにちがいない。俳諧の連歌は即吟、すなわち付け合いの早さも競われたのである。それを彼らの手柄として話したのがこの咄である。彼らの機知がこうして讃えられたのである。もう一話その例をあげてみよう。

有時宗祇宗長牡丹花三人風呂へ入りける。にたちすぎければ

ふくもふかれずするもすられず

と宗祇いひければ、おもしろし、これに一句づつつかまつらんとて

われぶゑのさらばささらに成もせで　宗長

山ぶしのかいわれじゆずのをはきれて　牡丹花

いましめのすずりのうへのほこりにて　宗祇

さきほど前句に意味を与えること、それが付け合いの遊びであると述べた。『新旧狂哥誹諧聞書』のこれも前句付けであるが、「ふくもふかれずするもすられず」の一句が、あらたに解釈されて咄が作りだされる。「する」と「ふく」の縁から、宗祇、宗長、牡丹花の三人が風呂に入る設定となる。ところが、湯が熱すぎて、「拭く」にもふけない、「垢すり」もできやしない、というのである。この宗祇の句に興じて、三人は前句付けに遊ぶ。句の解釈としてはそれに尽きるだろうが、これも即吟であることが前提となっているのを、やはり忘れてはならない。それがこの咄のおもしろさを保証しており、三人の連歌師を讃えることになる、というふうに読む必要があろう。宗祇たちを讃えながら連歌（俳諧）の楽しさを満喫していた咄の場があったことを思いえがいてみればよい。一座して句を作る場は、歌・連歌の話題に遊ぶところでもあった。

そう考えるならば、つぎのような狂歌咄が作られてもふしぎはない。根岸鎮衛が『耳嚢』に書きとめた（巻の八・細川幽斎狂歌即答の事）もの。

予がもとへ来れる正逸といへる導引の賤僧あり。もとより文盲無骨にて、そのいうところ取るにたらざれど、ある時話しけるは、太閤秀吉の前に細川幽斎、金森法印いま一人侍座せるに、太閤いわく、「吹けどもふけずすれどもすれず」という題にて前を付け、歌詠め」とありしに、一人、

わらわれて数珠うちきってちからなくするもすられず吹きも吹かれず

金森法印は、

笛竹のわれてささらになりもせず吹きもふかれずすれどすられず

と詠みければ、「幽斎いかに」とありしに、「いずれもおもしろし。我らは一向に埒なき趣向ゆえ申し出さんもおこなれど、かくあるべきや」と、

すりこ木と火吹き竹とを取り違えふくも吹かれずするもすられず

と詠ぜし由。滑稽の所、幽斎その要を得たりと見ゆ。

幽斎に結びつけられているが、それが事実かどうかは問題ではない。滑稽の一首によって太閤を感心させた「即答」の頓才に笑えばいいのである。咄の世界では、ときに幽斎はこういう滑稽人物として登場してくる。それよりもむしろ、この話が歌徳説話の体裁をそなえていることに注意すべきだろう。「滑稽の所、幽斎その要を得たりと見ゆ」ということばからは、幽斎の頓作に感心した太閤の満足げな顔が見えてくるようだ。こうして幽斎の機知をたたえるのがこの話である。一句そのもののあたらしみはない。周知の「前句付け」の一句を狂歌咄に仕立てたにすぎない。おそらく俳諧師か狂歌師が作者であろうが、彼らはこういう話を作りあげては、「歌の手柄」を語りついできたのである。

前句付けの遊びと昔話

（三）前句付けの遊びと昔話

歌の徳を語るのは、俳諧や狂歌をたしなむ者だけではない。昔話の世界にもそれは伝えられていく。もちろん一句をたくみに付ける手柄がたたえられるのである。『角館昔話集』[3]に収められた「和尚と小僧」の話はこんなふうに語られていく。

むがしあったぞん。あるお寺に和尚と三人の小僧がいてあった。その和尚さんは大変けちんぼうで、檀家から何貰っても小僧コ達には食わせないで、自分一人で食うのであった。

ある日「小僧さんに食べさしてけれ」とて、梨を一つ貰ったが、さすがに自分一人で食べることができないで、考えた末三人の中で、「切りたくもあり、切りたくもなし」という言葉を付けて、

前句付けの遊びと昔話

一番上手に歌を詠んだ者に梨をやるといって、先ず一番大きい小僧から、といったらその小僧は、

春先に障子にかかる梅が枝　切りたくもあり切りたくもなし

と詠んだので、和尚は、これに梨を取られるかと思ったら、次の小僧が、

硯箱の懸子に余る筆の軸　切りたくもあり切りたくもなし

和尚はそれを感心してしまった。最後に一番小さい小僧に詠めないかも知れないが詠んで見ろというと、

梨一つ惜しむ坊主の空ら頭　切りたくもあり切りたくもなし

と詠んだものだから、和尚は真っ赤になって怒って逃げる小僧の後を本堂をグルグルグルグル廻って、追ってとうとう捕まえた。そして「碌でもない奴だ」と、頭をグワンとぶんなぐると「ぷっ」と屁をたれる。小僧はただちに、

たちまちに国は二ケ国出でにけり　頭は播磨尻は備中

と詠んだ。それにはさすがの和尚も感心して、「梨はこの小僧に取られた」といってやったと。なあ。トンピンパラリ。

僧たらしいが、歌をいちばん上手に詠んだ小僧に梨は与えられる。こういう話を運んだのは誰か、いきさつは不明だが、全国にひろく分布することから、歌による「おどけ話」が好まれたことはわかる。僧まれっ子の小僧に託して「歌の手柄」を語って歩く連中がいたのである。

この話も時代をさかのぼって、遠く『犬筑波集』（雑部）にまでたどりつくことができる。

切りたくもあり切りたくもなし
ぬす人をとらへてみればわが子なり
さやかなる月を隠せる花の枝
こころよき的矢のすこし長きをば

単純な前句付けの遊びである。工夫してさまざまに付ける妙味が競われたのである。のちに松永貞徳が『あぶらかす』のなかで、「きりたくも有り切度もなし」の一句に、さまざまな付け合いを試みている。[4] それは初心者にむけての俳諧指導であるとともに、俳諧がもつ遊びの一面をアピールするものではなかったか。二句一章の付け合いの遊びから連歌の習練は始まる。そしてその遊びのなかから、あらたな咄がうまれてくる。つぎの『新撰狂哥誹諧聞書』の一話がそれである。

有寺へ檀那より大なるありのみ一つをくりければ、これに付て一句すべし。よく付けたる人に此なしを参らせんとて、坊主

きりたくも有きりたくもなし
硯箱のかけごにあまる筆の軸　大ちご
月かくす花のこずゑを見るたびに　小ちご

いづれも心をつくし給へば、しんぼち罷出、それがしも一句付申さんとて

なし一つおしむ坊主の細首を
といひければ、坊主腹を立ててかのなしを打ちつけければ、やがて取りて逃げける。

これも「和尚と小僧」の話である。付け合いは『犬筑波集』（雑部）のそれと大同小異であろう。しかし、「和尚と小僧」譚として語られるところに、付け合いを超えたおかしみはある。発心したばかりの新発意の、悪態のような一句が笑いをさそう。前句付けに遊ぶ俳諧の座が、こういう咄をうみ出したのであろう。

もちろんこの話と昔話のあいだには、はるかな時代の隔たりがある。たとえば狂歌咄にある「あり」と「なし」のことば遊びが、昔話にはない。「なし」を「ありのみ」といって縁起をかついだ時代の思考が、昔話を語りついだ人々には、すでに理解できなくなったのである。そんな知識はないにしても、それでも「和尚と小僧」の話に託して、僧たらしい小僧っ子の機知に笑ったのは、昔も今もおそらく変わりはなかろう。

くり返すが、この咄（昔話）が歌を話題とするところに注意するべきだろう。いずれも「切りたくもあり、切りたくもなし」ということばに付けて、上手に詠んだ者に梨をやろうというのである。前句付けの遊びにしたがって、「歌の手柄」が語られる。前句付けに遊ぶ狂歌咄が、昔話の世界にも、「歌の功徳」を語る話として伝えられてきたのである。小僧っ子の機知に興じる歌の話題は、時代を遠くへだてながら、「俳諧」の笑いとして語りつがれてきたのである。

（四）勧化本の狂歌咄

『三右衛門話』は石川県珠洲市の昔話を収めたものである。[5] そのなかに「リンの歌」がある。これもまた「歌の手柄」を語る。

寺子屋にお菓子があるときに、子供が食べたいでしょう。「和尚さん、お菓子い」てて。「ああ、ほんなら、わしがひとつ上の句をつけるさかい、お前たちは下の句をつけ」てて。「はいわかりました」てて。昔は風流なのんびりしたところありまして。「とにかくパリリンとかチリリンとかいう下の句をふくんで歌をつくれ」と、こういわれたんですね。ほしたところが、侍の子がしばらく考えとったが、

「りんりんとこぞりに反った小薙刀、ひと振り振れば敵はちりりん」

と、こういうたて。そこで、魚屋の子が、「私も一つ。

りんりんとこぞりに反った赤鰯、ひと噛みかめば骨はぽりりん」

というたちゅて。百姓の子は弱ったんですてや。そんな風な気もありませんし、もじもじしとって。「お前どうや」て。なかなかいい歌が浮かばんがです。「早くやらなだめや」て。「ああ、ほんなら」というて、

「けさ麦飯たべて腹張りりん」

と、こういうたて。「ああ、そうか、お前の歌はいつでも、わしのいうた気持ちにそうごしとる。ほんな褒美はこれや」というて、寺子屋の和尚さんからご褒美をもろうたと。

これも句を付ける遊びであるが、やはり、「早くやらなだめや」というふうに、早く作ることが要求されている。即吟に機転のはたらきがあると考えられていたのである。文字だけをたよりに読むわれわれには、理解がむずかしいだろうが、「早く」詠むところにも話のおもしろさはあったにちがいない。かくして歌とは無縁の無学な百姓の子が、和尚にほめられてごほうびにあずかる。

「歌の手柄」を語っているのだが、歌は、また、侍の子、魚屋の子、そして百姓の子、それぞれの人柄を映す。この話はそんなふうに語る。それも「歌の功徳」と考えられたのだろう。

説教僧はこの話を利用して、説教の材料とした。『勧化一声電』（宝暦十年刊・三冊）がそれである。この本には、上中下の各巻冒頭に「越中砺波　龍正述」とあって、浄土宗の説教僧龍正によって語られた咄であったようだ。[6] ここには中巻「函蓋相応」浄土論註之釈を引いてみよう。

弥陀ノ名号ホド、無上大利ハナケレドモ、不信ノ者ニ持テハ其甲斐アルコトナシ。売物ニハ花ヲ荘リ、鬼ニ鉄杖ヲ持スルハ相応ナリ。今モ勇者ニ利剣ヲ持セ、信者ニ六字ヲ授タルハ、是函蓋相応ナリ。或処ニ三人寄合タル時、沓冠ニリンヲ付テヨムベシトテ、先公家ノ子、

竜胆ノ、花ヲバ一枝手ヲリツツ、参ル御寺ハ嵯峨ノ法輪ト。次ノ武士ノ子、

リンリント反ニソツタル小長刀、一トフリフレバ敵ヤオチリント。後ニ平人ノ子、

リンリントソリニソツタル赤鰯、一トロクヘバ腹ハホテリント。此三子ガ歌ノ位ヲ見ルニ、初メノ歌ハ流石風雅タリ。次ノ歌

前句付けの遊びと昔話

ハ明暮心ニカクル処、歌モ亦勇アリ。後ノ歌バカリハ一向薬タイモナク可笑ケレ。喩バ笛ヲ吹ニ竹ハ一ツ竹ナリ、息モ同ジ息ナレドモ、音ハ穴毎ニ替ル如ク、此三人モ同天地ニ住テ同人間ナリ、意モ同ジ意ナルベキニ、育ツ処ニ違アツテ、貴賤上下ト隔タリ。今モ爾リ。同ジ名号ナリ、称フル品モ替ラネド、虚仮トモナリ真実トモナリ、育ツ処ニ違フ故、自力トモナリ他力トモナル。

ここに使われている「函蓋相応」の例話は、昔話の「リンの歌」そのままである。「函蓋相応」とは、函と蓋とがよく合致するという意。仏が説いた教えと衆生のそれを理解する能力、教え導く師と学び従う弟子との関係などの相応がいわれる。[7] この咄ではそれぞれが詠む歌とその境遇が相応することをいう。いわゆる「人は育ち」である。こういう例話を示して、阿弥陀仏への帰依を勧めるのである。人の「育ち」は隠せない。歌にそれはあらわれる。説教僧はこうしてたくみに歌を活用する。昔話を利用しながら、「リンの歌」が持っていた「歌の手柄」のモチーフをずらしていく。「歌の手柄」によってほうびを手にするという趣向から、「育ち」は歌にあらわれるという「函蓋相応」の例話にしてしまう。おそらくは説教僧の工夫であろう。それが説教の場を離れると、ひとり歩きして、つぎのような「落とし咄」となる。

去公家衆のちごと侍の子と、又ひとりは百姓の子と三人、都吉田山にゆいて、ちごのいひけるは「歌詠みてなぐさまん」とて、則りんとはねる題にてまづ児の詠めるは、

りんどうの花を一枝おりもちて参るところは嵯峨のほうりん

侍の子よめり、

りんりんと小ぞりにそつた小長刀一ふりふれば敵はおぢりん

又百姓の子詠めり、

りんりんと小ぞりにそつた赤いはし七疋くへば腹はぼちりん

とそれぞれの暮しに付て詠めるもおかし。

『諸国落首咄』（巻三・「兎角そだちははづかしきもの」）の一話である。ずいぶんこれはわかりやすい。「育ち」は歌にあらわれる。「リンの歌」の昔話は、説教の場をくぐりぬけて、「りんとはねる」ことを題にした「落とし咄」になる。[8] 「育ち」はあらそえない。歌にもそれはあらわれる、といっておもしろおかしい歌が示される。冒頭にあげた『醒睡笑』（巻之五・「人はそだち」）も、機知に興じる歌の遊びが、説教の席に持ちこまれたものと思われる。かつて策伝もこういう咄を、説教の席で「ひとはそだち」の例として語っていたのではないか。

（五）難題歌と幽霊済度譚

浄土宗の説教僧龍正は、『勧化一声電』に歌の話題をたくさん挿みこんでいる。その歌は多く昔話とかさなる。つぎのもその一例である。

サテ或処ニ三人寄居テ、「思フホドニハ云ハレザリケリ」ト云句ニ付タル。一人ノ云ク、「山賤ノ薪ニ花ヲ折ソヘテ」ト。是ハ薪ヲ定トシムレバ、花ノ損ズベキナレバ、思フホドニハユハレザリケリト。一人ノ云ク、「相見テノ舟デモノイフ別カナ」ト。是ハ語ラントスルニ早モ舟ノ行過ユヘ、思ホドニハイハレザリケリト。一人ノ云ク、「ボタ餅ヲ口ニ一ッパイハウバリテ」ト。折ワロクハウバリタル処ヘ来タ人ニハ、挨拶ダニモ思ホドニハ、云ハレザリケリト。　（下巻「信心歓喜」）

これなども「思うようには言われまい」の一句を付け合って、ごほうびに餅をせしめる昔話がある（『安芸昔話集』・「貰うた餅」）。[9] おそらくこれは、歌がかつては説教のタネとして用いられていたことを語るものであろう。龍正は説教僧として歌にかかわる話題を『勧化一声電』のなかにあつめているのである。思えば「一声」とは能楽用語で、シテが登場して最初にうたう短い謡の詞章のこと。七五調三句を基本形式とする。こういう歌の話題をタネとして、阿弥陀仏への帰依

へと誘うのである。その方便が歌、ことに「難題」の歌である。龍正はいつも「難題」の歌を話の末尾に添える。

難題ニ今宵ノ月ハ在レ天ト云　○影ウツス、水ハ氷ニ閉ラレテ、今宵ノ月ハ天ニコソアレ、ト。是水ダニアレバ必ズ移ルベキ月ナレドモ、氷ト成テ宿サヌ故、今宵ノ月ハ、地ニハナクテ、天ニバカリアルゾト也。今モ弥陀ハ天ノ月ノ如、衆生ノ信心ハ水ニ移月ノ如　（上巻「唯恨衆生疑不疑」般舟賛之文）

こんな具合に「難題」の一句が示されて解釈がつけられる。さらには歌に託して、称名念仏の一大事が語られる。しかもこの「難題」の一句「今宵の月は中空にあり」は、昔話「月の発句」にしきりに出てくる。[10] いま少しこの「難題」の歌について考えてみよう。

難題ニ囲炉裏ノ海ト云ヲ　○書ナラス、跡ハ汐路ノ浜ニ似テ、囲炉裏ハ海カ、オキノ見ユルハ、ト。此意ハ、イロリノ灰ニ文字ヲ書ナラスニ、其跡ヲ見レバ汐汲浜辺ニ似タリ、サアレバイロリヲ海トモ云ベシ、オキノ見ユルカラハト、沖ト澳ト通シテヨミタルナリ。　（中巻「不覚転入真如門」）

これもそのひとつ。「難題ニ」とあるのは、いずれの場合も、つづけて歌一首が紹介されることから、おそらく「難題歌」のことであろう。その歌とは、すでに『犬筑波集』（雑）に見えている。

灰ならす火ばしの跡は浜に似て
　いるりは舟かおきの見ゆるは

この解釈は、龍正の説明で尽きている。「灰ならす火ばしの跡は浜に似て」という前句を難題として、付け句でそれを解く体裁になっている。この前句付けが、『新旧狂哥誹諧聞書』では、太閤と幽斎（玄旨）との問答にかわる。

太閤秀吉公御たき火あそばすとて、いろりの灰、火ばしにてかきならし給ひ、
　かきならす灰は汐路の浜ならし

前句付けの遊びと昔話

付句　玄旨
　いろりは海かおきの見ゆるは

単純な連歌咄であるにしても、難題を解いた幽斎に、太閤も兜をぬいだにちがいない。これもおそらく即座の返答であったにちがいない。それならばやはり歌徳説話である。説教僧龍正は、こういう「難題歌」を書き留めては、説教の席で活用したのであろう。それがふたたび昔話として伝流していく。『対馬の昔話』から「灰の発句」を示してみよう。[11]

むかしね、もう八十あまりだったお爺さんがね、なにもできず、毎日、いろり端で火をぬくんでおった。なにも仕事がないから、暇しゅうて、箸を持って灰を混ぜよった。ところで、どうもその、波、波に詠んだわけ。歌を一つ作った。

かきならす灰は　浜辺の波にさも似たり

どうしても先の句が出てこない。毎日考えていたが、浮かばないまま、とうとう死んでしまった。とことが、死んでその晩から、化けて出てくる。幽霊が出てきて、

かきならす灰は　浜辺の波にさも似たり

と言うと、ぼおっと消える。毎晩出てくる。

息子はその部落で歌を作る上手な人がおったもんじゃけえ、そこに行って、なにかいいことなかろうか、こうしてうちの親父が毎晩出てきていけん、と言った。そこでその人が、「よし、おれが今夜やってやる」。その人が来て、夜が更けわたって、一時、二時のところで、幽霊がぼおっと出てきた。そしたら、頼まれた人が、

いろりが海か　沖（澳）が見えるぞ

と詠んだ。明け晩から出なかった。

これも歌徳説話である。一句に執着を残して死んだ幽霊が、付け句によって救われて往生する。歌徳説話の形をとりながら、幽霊済度譚

ともなっている。歌の上手が付けた句によって、幽霊は一句の執着から解きはなたれる。この付け合いは、いわば「難題」を解く歌である。この昔話も、おそらく説教の場をくぐりぬけているにちがいない。時代をさらにさかのぼれば、幽斎の歌徳説話に、さらには『犬筑波集』の付け合いにたどりつくのである。説教僧は、しかし、前句付けや歌徳説話を材料にしながら、「難題歌」を用いて、一句の執着から解きはなたれる幽霊済度譚をこしらえあげた。そこに説教僧の工夫はある。もちろんこのいきさつは、もう少し具体的に論じなければならない。

（六）歌への執着

ここに「芭蕉諸国物語」ともいいうる写本、『行脚怪談袋』（安永六年以前写本）がある。[12] 体裁は『宗祇諸国物語』にも似て、芭蕉の回国物語に託した怪異譚である。もちろん芭蕉翁には何の関係もない。さて、あるとき芭蕉は俳諧数寄者に歓待されて、一句を求められる。ところがそれは芭蕉をためすような難題の句であった。

其後皆々、芭蕉へ望み、

「下より上へつるしさげたり」

という題を出し「先生は此道にあまねくかしこければ、なんと此題へ一句を付けて見給へかし」といふ。芭蕉「是は難題かな」と暫くも思案なせしが、かたわらの筆をとり其題の次へ書付る

風鈴の思わずにみる手水鉢

と吟じけれは、仲屋を初め一座の者おのおの感じ入しとかや。

これも「難題歌」の話である。もちろん難題をこともなく解いた芭蕉をたたえる歌徳説話ともなっている。ただし、この話にはもうひとつの趣向が隠されている。もちろんことは「難題」にかかわる。「下より上へつるしさげたり」という前句がそれである。たしかに正体不明の一句であるが、これには隠された意味がある。この物語が「怪談」と題されていることを思えば、「下より上へつるしさげたり」というのは幽霊である。「さかさまの幽霊」、この世に執着を残して死んだ幽霊の姿である。[13] これは一句に執着を残して死んだ「幽霊の句」なのである。芭蕉はこの「難題」を、「風鈴の思わずにみる手水鉢」と解いた。手水鉢に映るさかさまの風鈴。もちろん隠された意味を承知のうえで、夏の涼しげな景に転じてみせたのであろう。こうして芭蕉は讃えられるにしても、眼目はやはり「難題」の歌にある。

「幽霊の歌」といえば昔話にもある。『奥備中の昔話』から「幽霊の上の句」をあげておこう。[14]

昔、あるところに、どうも幽霊が出ていけんのじゃ。何人が通うても、そこを通りゃあ幽霊が出る。せえで、ある人間が、なんでもひとつその幽霊を調べて、話ゅうしてみちゃろうというので、その幽霊へ話したところが、

『下より上へさがるものなり、下より上にさがるものなり』

言うて、せえから、その人間が、こりゃあ歌にこがれて死んだんじゃ。上の句が分からんじゃったんじゃろう思うて、

『池の上の下がり藤、下より上へさがるものなり』

と。そうしたら、にこっと笑うて、それぎり出んようになった。昔こっぷり。

これも「難題歌」の話である。歌にこがれて死んだ幽霊の上の句を付けて、往生させてやる。歌への執着を強調して、救済の機縁となった一句の功徳を語る。すなわちこれも「歌の功徳」を説く昔話である。かってこういう「幽霊の歌」の話は、龍正のような説教僧が語っていたのではないか。「難題歌」の話として、説教の材料になったのである。

そのことは『越中射水の昔話』に収められた「和尚はん助けた蓮如様」がはっきりと示してくれる。[15]

昔々、或時蓮如様が旅をあるかはったがやと。そしたら、どこで

やら知らねど暗なってしもうて弱ってはったとい。どっかねいい宿ないかい言うて尋ねはったれど、なかなか目ね当らんだと。そしたら或在所の者来て、「たわいない昔からの空寺一軒あんがやれど、あこならどうや」言うて教えてくれたもんやけでそこへ尋ねていったがやとお。蓮如様そこで泊まるがねして、ごはん食べてしもうてから休まはったとこがのお、夜になってから、何処やら知らねど、人が来たがや思うたがと一緒に、すうーっと枕元へ和尚はんが一人出て来て

「下から上へ下がるもん」

言うて、蓮如様の顔を上から覗いたとおい。そしたら蓮如様がすぐと、

「藤の花水にうつして見るときは下から上へ下がるこそすれ」

言うたとお。そしたら和尚はん喜んでしもて、

「おら問答に負けてから長いこと迷うておったれど、こっでこさ成仏でつける」言うたとお。そして、すうーっと姿消えてしもうたとお。空寺のこた何宗やったか知らねど、そっから真宗へかわって何処やらにあるいうこっちゃてえ。

越中は真宗に対する信仰が厚いから、土地柄にふさわしく蓮如さんの讃歎話にとってかわる。この昔話集に解説をつけられた伊藤曙覧によれば、この話は説教僧によって語られたという。[16]

又仏教との関連で気付くのは、化け物昔話において、越中の仏教的伝統による変形ということに気付く。ことに蓮如上人よって迷っている坊主が救われる話はその一例とみられる。（中略）つまり説教僧、民間仏教宣布者などが加わっていたと考えてみなければならない。

もちろん真宗地帯の越中だから、蓮如さんに結びつけられるのは自然であるが、元来こういう「難題歌」の話は、龍正のような説教僧によって語られたのだろう。「難題歌」に託して、幽霊の執着を解きはなつ済度譚を、彼らはこしらえたのである。

前句付けの狂歌話や「歌の手柄」を語る歌徳説話（昔話）が、彼ら説教僧の手にわたることによって、歌への執着を語る幽霊済度譚として装いをかえて生まれたといってもよかろう。

昔話を利用して、説教僧は幽霊済度の話を作りあげる。一句に執着する幽霊の歌は、難題歌とはいえ、本来は前句付けの遊びである。たわいもない俳諧の遊びである。遊びとはいえ、しかし、「即答」の機知に興じる咄を、幽霊済度譚に仕立てあげて、一句への執着を語りえたのも、「歌の功徳」を語る長い歴史があってのことであろう。説教僧はもちろん、民間にあって昔話を語りついだ人々も、そのなかに身をおいていた。二句一章の前句付けに遊びながら、付け合いの「早さ」をも競う。そこからうまれた歌徳説話のうちに、幽霊済度譚もくわえられる。これも日本の口承文芸のひとこまである。

（注）

（1）鈴木棠三「連歌と笑話」（『中世の笑い』所収・秋山書店）

（2）島津忠夫「連歌師と咄」（『連歌の研究』所収・角川書店）

（3）武藤鉄城編・全国昔話資料集成12・岩崎美術社

（4）鈴木棠三「犬つくばの世界」（『中世の笑い』所収・秋山書店）

（5）大島広志・常光徹編（桜楓社）

（6）西田耕三校訂『仏教説話集成　一』（解題　西田耕三）国書刊行会

（7）『当麻曼陀羅疏』は浄土宗・聖聡上人の著作であるが、その巻十二に「函蓋相応」の用例が見える。

サテ顕シ玉ハン尊像ニハ可ト織二何法何経ヲモ一之処ニ織ト顕セリ説クニ此経ノ韋夫人ノ能請ノ得益二五百侍女ノ発心往生之経文ヲ上時機相応シ玉ヘル是即此曼陀羅ノ所表隨感函蓋相応セリ

(8)「リンの歌」の初出は、おそらく『多聞院日記』(天文十年条)の一条であろう。

リントウヤキヽヤウノ花ヲヲリ持テマイル所ハサカヤ法輪
リン〳〵ト尾頭ハヌルナマイワシクウテノ後ハ腹ハホチリン

この歌が「はね字」の遊びであることは、かつて論じた(拙稿「はね字の遊び—聯句・連歌・俳諧—」(『咄・雑談の伝承世界』所収・三弥井書店)

(9) 磯貝勇編『安芸昔話集』(全国昔話資料集成5・岩崎美術社)

(10) たとえば稲田浩二・福田晃編『大山北麓の昔話』(昔話研究資料叢書4・三弥井書店)にも収められる。

(11) 宮田正興・山中耕作編『日本の昔話24』(日本放送出版協会)

(12) 伊藤龍平「翻刻　会津図書館所蔵『怪談大雙紙』」(「國學院大學大学院　文学研究科論集」28号)

(13) 服部幸雄「さかさまの幽霊」(『さかさまの幽霊』所収・平凡社)

信多純一「西鶴謎絵考」(『にせ物語絵』所収・平凡社)

(14) 稲田浩二・立石憲利編(昔話研究資料叢書8・三弥井書店)

(15) 伊藤曙覧編(昔話研究資料叢書6・三弥井書店)

(16) 前掲伊藤編著(15)解説

(本学教授)